

朝起きたらすること

samuel

夜、目を閉じて寝ていたら見慣れぬところにきていた。

ふらふらさまよっていたら、急に声をかけられた。

「君、新しいもんかい？」

「ええ、まあそうですけど」

「ここにきちゃだめだよ、きっと」

といて立ち去ってしまった。

変なじいさんだな、とおもいつつも先に進む。

「ここは、夢の中なんだよ。だから、寝ている自分を起こしに行かないと起きることはできないんだよ。」

ちいさい女の子がいた。

「君は？」

「わたしは、起きれなくなった人なの。夢の中に埋もれてしまって、もうむこうにはいけないの。早く起こさないとむこうがわに行けなくなっちゃうよ」

女の子は指差すと、その先には無数のベッドが置かれた草原があった。

めんどくさいな、と思いつつそこに行くと自分が寝てた。

「ねえ、起きないと戻れなくなっちゃうんだって。早いとこ起きれば朝になるんだからさ」

「ずっと寝てたいんだけど」

「じゃあ、どうしたいわけ？」

「どうもしないし」

「朝になったら、牛乳飲もうよ」

「余計眠くなりそうだけど」

「まあまあ、そこをなんとか」

「しかたないな・・・」

窓際に日差しがさしている。そうか、わたしは起きられたのだ。

冷蔵庫を開ける。白い牛乳を一杯。

「今日もわたし、始動しますか」